

平野克己著

『図説アフリカ経済』

日本評論社 2002年 vi+185pp.

絵 所 秀 紀

「アフリカ経済を総体として語る」という、気宇
 壮大な書である。チャレンジ精神に溢れていると言
 ってもいい。またタイトルに「図説」とあるように、
 図表を多用しながら、アフリカ経済入門を目指した
 書でもある。構成（序章「アフリカ経済論」に挑む
 ／第1章 成長しない経済／第2章 アフリカの農
 業／第3章 アフリカの製造業／第4章 アフリカ
 の対外経済関係／第5章 地域経済協力／第6章
 4割経済大国南アフリカ／第7章 成長しない経済
 の行方）から読み取れるように、正面からのアフリ
 カ経済論を目指したものである。また第1章および
 第7章のタイトルから窺われるように、開発途上
 にある経済ではなく、「成長しない経済」としてアフリ
 カを理解し、その原因を探り、あわせて処方箋を
 提示する試みである。

なぜアフリカは「成長しない経済」であるのか。
 著者の解答は簡明である。すなわち、アフリカでは
 農業革命が欠如しているからであり、したがって求
 められているものは「穀物の土地生産性を少なくと
 も倍に増やそうとする開発政策」である。「成長し
 ない経済」としての「アフリカ問題」は、アフリカ
 経済の「構造的特性」に起因するものであり、「自
 由化と開放化だけでは」問題を解決することはでき
 ない。また、「貧困層の8割を構成する小農の所得
 向上」がないかぎり、貧困問題も解決できないと結
 論付けている。

本書は主に国際諸機関の各種統計を整備しながら、
 48カ国に上るアフリカ世界の経済像を、アフリカを
 構成する諸国間だけでなく、アジアやラテンメリ
 カ、また先進工業諸国と比較する中から、明らかに
 したものである。本書の第1の貢献は、この点にあ
 る。剛速球投手でなければならぬ、なかなかの
 力業である。こうした試みをする中から、おそらく
 著者自身も多くの発見をしたに違いない。しばしば

「モノカルチャー」経済の典型として描かれてきた
 アフリカ像の「幻想」（32ページ～）、ロバート・ベ
 イツの主張する「収奪国家」論に対する疑義（57ペ
 ージ～）、製造業雇用面におけるモーリシャスの際だ
 った特異性（63ページ～）、外国直接投資（FDI）
 の受け入れにおいてGDPの3倍近いFDIストックを
 持つレソトの例外性（92ページ）等々、興味を
 そそる多くの発見がある。また第1章第3節の「ア
 フリカ開発思想の変遷」は、パンアフリカニズムか
 らラゴス行動計画やバーク報告を経て、世銀の構造
 調整思想とアフリカからの代替案に至るまでの内容
 を手際よくまとめたもので、入門者にとってもわか
 りやすい。

しかし剛速球投手にも弱点がある。さまざまな比
 較においてアフリカ経済の特性を描き出すという意
 図はすばらしい。が、しばしば比較の意味が十分に
 伝わってこない。表面的あるいは恣意的な比較にと
 どまっているという印象を受ける。例えば、メイズ
 の土地生産性を比較した図2-6ではジンバブエ、ケ
 ニヤ、タンザニアが選ばれているのに対し、国際比
 較をした図2-7ではアフリカからガーナが選ばれて
 いる。なぜか。あるいは「ほぼ同じ1人当たりGNP
 を有する」という理由だけで、セネガルと中国、イ
 ンドとケニヤ（65ページ～）、あるいは南アフリカ
 とマレーシア（158ページ～）の製造業が比較され
 ている。なぜか。こうした比較に、どれほど意味の
 あるロジックが隠されているのであろうか。また時
 折、舌足らずの感があるのも否めない。モーリシャ
 スの輸出志向工業化と香港資本との関係について叙
 述がない。レソトのFDIがずば抜けて高い理由が
 触れられていない。南アフリカの将来にとって「産
 業政策」が必要であるとしているが、どのような産
 業政策が必要なのか、これまた論じられていない。

最後に2点。「総体としてのアフリカ経済」とい
 う試みは理解できるが、初学者には個々のアフリカ
 諸国の具体的なイメージがつかみにくい。主要国だ
 けでいいから、コラム仕立てによる国別の概説をつ
 けてもらえると、有り難い。また索引がついていな
 い点は、力作であるだけにとても残念な気がした。

（法政大学経済学部教授）